

16
125
96

萬葉集古義

田上美

館書圖京東

九	一		
二	三		
冊	號	架	函
		類	門

集古義

四上

天

明治十九年九月十一日内務省交付

萬葉集古義四卷之上

土佐國 藤原雅澄撰



シタシニウタ

波ハノ天スメラ皇ミコトノ妹イモメ奉タテマツレル上マス在ヤマ山トニ跡スミ皇ミコト

イモノミコ

シ

ウタ

ヒト

ツ

兄エ御ミ詔コト一首

天皇ハ仁徳天皇ナリ。妹トハ書紀小應神天皇ノ皇女九柱コノハシラと舉アゲる。其中荒田皇女ハ御同姉ミイロコ小坐コイロハ其餘

萬葉集古義四上

いづれの皇女と申せる小や、詳ならび〇皇兄ハ、仁徳天皇の御同母兄ミイロモセと申せり。ときこえり。あゝる小書紀を檢る小。應神天皇の皇后仲姫、命の御腹小。荒田皇女。大鷦鷯天皇。根鳥皇子の三柱坐て。仁徳天皇の皇兄と指奉るべきハ、古事記も同ト趣あり。庶兄シマノセ小ハ、額田、大中彦皇子、大山守皇子、去來、真稚、皇子坐ど。其等小ハ、あらト傳の混いゝる小や。猶考べし。さて是ハいづれの皇子ユエ小まれ。所縁ありて。大和國小住坐せる間。いづれその皇女の思ひまつりて。作て贈奉賜へる御歌なり。

一日社人母待告長氣乎如此
所待者有不得勝。

人母待告ハ、告ハ志、字の寫誤なるべし。志草書相似あり。故ヒトヲモマチシと訓つ。さて上小社といひて。過去スギニ一方をいふ志の辭シふて。結めトヂる例タシハ、後撰集八卷小。黄葉ハ惜ウレシき錦ニシキと見ミのども。霽雨シゲレと共小降てこそ來コ。拾遺集九卷長歌小。木高コダカき蔭カゲと仰オホられむ物モノとこそ見ミなどあり。此集の比ヒより前マヘハ、外ウチ小見ミあり。此ハ決ハて古コより

ある格なるべし。今昔物語小きのふあゝの所へ行
り。小かゝる事こそありし。と逢人ごとふかされ
バ云々。平家物語小。山門の滅亡。朝家の御大事とこそ
見え。云々。又今生後生のけりやうふてあらむる
そと宣ひける。こそいとい。又良志と結絶する。古
深うの聞えし。ふど見ゆ。又良志と結絶する。古
くよりあり。其の六。卷四十三。丁。長歌小。諾己曾吾大王
等。霜。同。反。歌。小。三。日。原。布。當。乃。野。邊。清。見。社。大。宮。處。定。異
等。霜。古。今。集。小。秋。の。夜。ハ。露。の。経。露。の。緯。こ。寒。か。ら。草。む。ら
毎。小。虫。の。こ。ぶ。れ。ハ。霜。の。散。忠。集。小。松。の。多。小。風。の。志。ら
べ。と。ま。の。せ。て。ハ。立。田。姫。こ。そ。秋。ハ。ひ。く。ら。し。為。忠。朝。臣
集。小。み。山。ふ。ハ。雪。こ。そ。や。く。つ。る。ら。し。み。の。松。人
冬。や。み。み。る。ふ。○長氣ハ。長き日數と云む。如し。氣
ど。あ。る。こ。れ。な。り。○長氣ハ。長き日數と云む。如し。氣
ハ。來。經。の。約。多。る。詞。ふ。て。上。小。往。々。出。つ。○如此所待者
ハ。所。ハ。耳。字。の。誤。ふ。て。カ。ク。ノ。マ。テ。バ。あ。る。べ。し。と。本

居氏云里○有不得勝ハ。有不得勝といふ有のねつ

もといをむ。如し。嗚呼有有て待小。さても得堪ぬ事

哉と云意なり。奈久ハ添する辭あり。七。卷九。小。佐保河

爾小驟千鳥夜三更而爾音聞者宿不難爾。十。卷五。十。小。

蟋蟀之吾床隔爾嗚乍本名起居管君爾戀爾宿不勝爾。

十二。十一。小。吾兄子爾戀跡二四有四小兒之夜哭乎爲

乍宿不勝苦者などある。みな同例なり。○歌意ハ。一

日許をこそ人を待小。も待堪小。れ。如此まで長日數

を經ぬれば有有て待小。さても待堪ぬ事哉とのこま

へるなり。二。卷小出せ了古事記歌小待爾者不待志

の意を
もさと
りつ
べド

岳本天皇御製歌一首并短

歌

岳本天皇ハ舊本大御歌の後小注して云右今案高市
岳本宮後岡本宮二代二帝各有異焉但稱岡本天皇未
審其指とあり高市岳本宮ハ舒明天皇後岡本宮ハ齊
明天皇なり舊注小云る如く二代の中いづれの天皇

ふの審ならねど今御製詞小依て考る小後岡本宮齊
明天皇の皇后小立せ賜ひて後のまゝいまま皇后
小立せ賜をぬ前の舒明天皇と思奉りて御製坐る小
やあらむ〇御製歌歌字舊本小ハあゝ例小依て補つ

神代從生繼來者人多國爾波
滿而味村乃去來者行跡吾戀
流君爾之不有者晝波日乃久

流留麻豆。夜者。夜之。明流寸食。

念乍寐宿難爾登阿可思通良

久茂長此夜乎。

生アレツキクレバ繼來者ハ遠き神代より天の益人益々小繼て生出
來バといふなり○人多ハ古事記中卷歌小意オサカノ佐加能
意オホム富牟盧夜爾比登佐波爾岐伊理表理とあり○味アサヒ村
乃ノと味字元曆本作ハ誤オありハ妹ハ枕詞なり阿遲アヂといふ鳥の群オ

り此鳥のことハ品物解小云○去來者行跡ハ反歌小
味アサヒ村騷ササキとあればこゝもサワキハユケドと訓べし去
來の字ハ味村の往反意キふて書るあるべし定家卿の
長歌短歌のよしの事小もさわきと有又一本小も志
のよめ里是古訓レなるべしと源嚴水云里廿卷小も安ア
治牟良能佐和伎伎保比豆テとあり○吾戀流云々ハ十
一五小打日刺宮道人雖滿行吾念公正一人とよめる
類キミなり○君爾之不有者バ有字元曆本ハ小ハ之シハ助辭小
てその一トぞちととりもてしおもく思をける處小お
く辭ヒルなり○晝波云々ハ晝字元曆本ハ小ハ盡ハの四句ハ二卷

二十 カシメウタ 挽歌小夜者毛夜之盡畫者母日之盡哭耳呼泣乍
 四丁 アテテヤ 在而哉十三 十四 相聞小赤根刺畫者終爾野于玉之夜
 ハスガラニコトノヒシトナルマテカキツルカモ
 者須柄爾此床乃比師跡鳴左右嘆鶴鴨おどよめる同
 トころるなり○寸食ハ 借ハミ 極小て限と云むが如○
 寐宿難爾登この登字ハ乃三の二字の誤あるべし草
 書小乃とかけざるを混誤あるべしイ子カテニ
 ノと訓べし○阿可思通良久茂ハ明いつるもの伸
 里さるなり 良クハ留ル 明いつる事哉といふ如し茂
 ハなげきの意をふくめる助辭なり寐りて小のみ明
 かつることハ アハレ 嗚呼さても悲しき事小てある哉とい

ふ意なり○長此夜乎ハ十一 四十 小念友念毛金津足
 檜之山鳥之尾之永此夜乎とよめり○大御歌意かく
 れさるところなり十三 九 相聞小式島之山跡之土丹
 人多爾滿而雖有藤浪乃思纏若草乃思就西君目二戀
 ヤアカサムナガキコノヨヲ シキシマノヤマトノクニニヒトアリトシモハ
 八將明長此夜乎反歌式島乃山跡乃土丹人二有年念
 バナニカナゲカム
 者難可將嗟とあるハ今の大御歌の意味小同ト又同
 卷 二十 小玉田次不懸時無吾念妹西不會波赤根刺日
 ハシミラニヌバタマノヨルハスガラニイモ子ズニイモヨルニイケル
 者之彌良爾烏玉之夜者醉辛二眠不睡爾妹戀丹生流
 スベナシ
 爲便無とあるも
 詞義似通へり

反歌 カヘシウタ

山羽爾味村騷去奈禮騰吾者 ヤマノハニ アヂムラサワキユクナレドアレハ

左夫思惠君二四不在者 サ ブ シ エ キミ ニ シ アラ子バ

山羽ハ山端なり既く出つ〇味村騷去奈禮騰アヂムラサワキユクナレド 騷字仙
寫一本拾穂本等ハ騷異本ハ躁トハ味村ハ枕詞
作里奈字活字本ハ桑と作るハ誤なりハ味村ハ枕詞
小味村乃といへる小同トク騷をいむ料ふてこハ
ハやめて其と引續てのまへるなり騷去ハ人の騷

行來なりこを耳近く解バ山端小味の群鳥の騷きて
行如く國內道路あまゝ人ハ滿騷き行なれどといを
むの如く契沖の味村を人ハあてのまへるなりと云るハまぎらそい
〇左夫思惠ハ左夫思ハ既く一卷小出つ惠ハ歎息辭なり十一
十六小足千根乃母爾不所知吾持留心者吉惠君之隨
意十四十二小可美都氣野左野乃九久多知乎里波夜
志安禮波麻多牟惠許登之許受登母天智天皇紀童謠
小愛俱流之衛阿例播俱流之衛おどあり〇君二四ハ
四の助辭ハその一をちをとりあてゝおもく思を以
る處小おく辭あること上小云るの如く〇大御歌意

ハ山の端小味の群鳥の騒きてゆく如く。國內道路を
 満ちるときて人ハおろく行ふれど一人ぞ小吾戀しく
 思ふ君ふあらねばなぐさむ意もあく。一をぢふさ
 ぶくく。さてもあしく思をるゝ事哉となり

淡海路乃鳥籠之山有不知哉

川氣乃已呂其侶波戀乍裳將

有。

鳥籠之山ハ近江國犬上郡小在十一三十三丁小狗上之鳥
 籠山爾有不知也河天武天皇紀小元年秋七月戊戌男
 依等討近江將秦友足於鳥籠山斬之など見ゆ○不知
 哉川ハ鳥籠山より流出る川あるべし源氏物語小い
 の物ども小いさ川と書るハ皆この不天武天皇紀
 知哉川ありいさ川と書るハ皆この不天武天皇紀
 小將襲不破而軍于犬上川濱とある犬上川ハ則此不
 知哉川小やと契沖云里○氣乃已呂其侶波ハ契沖の
 いさや川といひて氣とつゞけさせたまふ心ハ氣ハ
 水の氣小て川霧ありと云里其意あり。つぎ草小汀
 ちりとゞまりて霜いとあろり置るありとや水
 り煙の立こそをのけれとある煙も水の氣なり畧

解小不知哉川といふを、やぶて女の情をいささて受
 不知と云ふと、りなり賜へりと云るハ、通難し。さて受
 する下の意ハ、氣ハ氣長ケナガの氣ケ已呂其侶波ハ、本居氏の
 呂ハ乃字の誤と云る如く小て、來經キミの此頃者コノトキノなり○
 大御歌意ハ、日の暮る迄夜の明る限戀しく思へども、
 其志るしご小なければ、縦ヨシや此日頃コノトキハ、戀つゝもさて
 あり得むよとなり上小ハ、御思のさのりなるを宣ひ、
 こゝ小ハ、いさゝのその切なる
 を設て、縦ユルべ賜へる御趣ミオモキなり
ヌカ タノオホキミノミモマツテアフ ミノ スメラ ミコトヲヨシモル ウタ ヒト

額田王思近江天皇作歌一

首ツ

額田王ハ一巻小出て具注り

○近江天皇ハ天智天皇あり

君待登吾戀居者我屋戸之簾キミマツトアガコヒヨレバワガヤドノスダレ

動之秋風吹ウゴカシアキノカゼフク

スダレ 簾ハ字鏡小箔須太禮スダレ箔簾也須太禮スダレと見ゆ名意ハ簀
ダシ 垂ダシなり十一ト八ハ小玉垂タタレ之小簀ササ之垂ダシ簾スダレ乎ともよめり

○秋風吹ハ人ヲ戀シク思ふをり。風の吹來るハ其人
 の來らむとまゐる前兆シルシそといふ諺のありしをふみて。
 よみ給へるなるべし。其ハ八卷三十五丁字合卿歌小我背
 兒乎何時曾且今登待苗爾於毛也者將見秋風吹也ハ
 面輪おもてとあるもいつの來むと待居あべ小面輪の
 見え來むといふ前兆小秋風吹とよまれざるを思ふ
 べし。契沖が簾動の秋の風吹ハもいやおをしまに
 おもひてをあらるるふり。と云る如く小誰か下こと
 りハ志の意得らるるふ次鏡女王歌ハやおか歌ハ
 答へてよみ賜へりとおか鏡女王歌ハやおか歌ハ
 戀流波乏之といふこと相應ぢふ不次ふいふを見
 考へ
 ○歌意ハ君を待て吾戀シク思居ればその人の

來座へき前兆あるべし。簾をうごのして風のそよそ
 よと吹來れるハいとあのもしき事そとなり。○六帖
 つとこひつふれバこや
 どのそよきうごきて秋風そ
 吹と有ハまどれをまき
 と寫し誤れるあるべし
 鏡女王作歌一首

鏡女王も一卷小具注王舊本女王
 を王女と作るハ誤あり今改めつ

風乎太爾戀流波乏之風小谷

將來登時待者何香將嘆。

戀流波乏之ハ戀流ハ愛る意既云王乏ハ例のうら

やま一の意なり○風小谷ハ上なる詞を重ねあるの

みあり風乎谷戀流波乏之といふ二句を重ね云意あ

りと本居氏の説る如し○何香將嘆將字活字本小時

ハ嘆くべき事小あらびとなり十卷五十金山舌日

下鳴鳥音聞何嘆とある小同ト○歌意ハ簾動之秋風

吹とて風を愛賞賜ふハうらやま一きこと小そ侍る

これハ夫君の來坐む前兆の風ぞ吹ねバ甚うき事

なり其風をものみふて君の來坐むを待バ何のハ嘆
くべきことのあらむとなり此風を使ありと云説ハ
風吹を君のとおもひをあらるうけがさし又上歌の秋
み見てハ答へ賜へる意小ハ彌疎意○
以上二首歌ハ卷秋相聞小更出せり

吹黄刀自歌二首

吹黄刀自ハ

一巻小出

真野之浦乃與騰乃繼橋情由

毛モ思オモヘ哉ヤ妹イモ之ガ伊イ目メ爾ニ之シ所シ見ユル。

真野之浦ハ攝津國八田郡なり。十一四十小真野浦
 之小管乃笠乎不着而來二來有まマ真野池之小管乎
 笠爾不縫爲而まカサニヌハズレテ三卷二十七卷十四小白管乃真
 野乃榛原とよめるも皆同地なり。○與騰乃繼橋ハ攝
 津志小苧藻橋在矢田部郡東尻池村或曰真野繼橋即
 此とあり繼橋ハ今の瀬田の橋の如く中小島の如き
 處ありて又懸渡せるを云なるべしと云里金葉集小
 や與騰の繼橋よとよみさつれなき人を戀渡るといひさして心より繼て思へば小

や妹の夢小ハ見ゆるむといをむカミノカムスギめなりと契沖の
 云る如し二卷高市皇子尊の神之神須疑スギとよませ賜
 へるも十市皇女の薨坐スギるを須疑スギと云る小もよせ賜
 へると同例なり○情由毛ハ情從も小て情裏よりも
 といふが如し毛ハ表ハさるもの小て裏ウチよりも眞實
 小思ふよコトさ里此下ニ三十小從情毛我者不念寸五卷
 五小許許呂由母於母波奴阿比コト絶爾七卷三十小從心
 毛不想人之衣爾須良由奈十一四十小小野之淺茅乎
 自心毛人引目八百コトおど見ゆ皆同オモヘヤイモガ○思哉妹之ハ思
 ば小や妹のといふ意なりさて妹と云る小つきて既

く契沖の吹黄、刀自の歌あらば、妹小ていなく、君小
てあるべし。ももとより妹あらば、別人の歌なるべ
し。刀自と名小おひて、第一卷、歌小ハ、常小もがもあ
ことをとめ小て、とよみされば、まぎれなく女ありと云
り。この誰も昔來疑ふことなれど、此下五十小紀、女郎
褻物贈友歌小、為妹袖左倍所治而川流玉藻鳥と見え、
又十九小家持卿の妹の、其妻の許小贈歌、其答歌、ど
小も皆妹と云れば、此頃ハ、やゝ女どちの間小ても、稱
こと小ふれり。なり。かくて是ハ女どちの間小ゆる
ありて、情を告遣れるあるべし。さて次、歌小ハ、我背子

とよめれば、もとより別時の作小てあり。なり。○伊
目爾之所見ハ、夢小所見小て、之ハ、その一トきおなるこ
とを、おるく思ハせしる助辭あり。○歌意ハ、打つゞき
て絶ぞ戀しく、情裏より眞實小思へを小や、夜々夢小
見えて、一トきお小戀し
く忘れぬとなり

河上乃伊都藻之花乃何時何
時來益我背子時自異目八方

田部忌寸櫟子任太宰時歌

四首

櫟子ハ

傳知ギ

衣手爾取等騰已保里哭兒爾

毛益有吾乎置而如何將爲

舍人千年

等騰已保里ハ取著て留るよなり本居氏云等騰ハ
留なり己保里ハ凍と同言なり行水も凍れば止まれ
バなり○歌意ハ母の袖小取著留里て哭慕ふ乳兒小
も益里て君を慕ふ吾なるを遺置ていの小せむとの
えるとかり廿卷三十小可良己呂茂須曾爾等里都伎
奈苦古良乎意伎豆曾伎怒也意母奈之爾志豆又三十
島守爾和我多知久禮婆云々若草之都麻母古騰母毛
乎知己知爾左波爾可久美爲春鳥乃已惠乃佐麻欲比

之路多倍乃蘇塗奈伎奴良之多豆佐波里和可禮加互
爾等比伎等騰米之多比之毛能乎などあるを考合スベ
一〇舍人千年の四字ハ舊本小ハ無元曆本小從里又
古寫本拾穗本等小ハ舍人吉年とあり吉年ハ二卷小
既く出つ千吉一ハ一と誤れる小て同人なるべし櫛
子の相知れる女なるべし傳未詳ならび櫛子の太宰
小任られてゆく時この
千年のよめる歌なり

置オキ而テ行者ユカ妹バ將イモ戀コヒ可ム聞カ敷モ細シキ乃タヘノ

黒髮布而長此夜乎。田部忌

寸櫛子

黒髮布而ハ黒髮を床名カミシキテふりち敷て寢てのよしなり。十
一十九 小夜于玉之妹之黒髮今夜毛加吾無床爾靡而
宿良武又ニ夜于玉之吾黒髮乎引奴良思亂而反戀
度鴨ワタルカモなどある小意同ド〇歌意ハ妹を遺し置て旅小
行バ妹の黒髮を吾なき床ふりちし櫛して長き此
夜を吾を戀しく思いつゝ寢らむのさりとはいとわ

しき事となり。一五三四二と句を次第で意得べし。此は千年ハ、櫛子ガ相あれる女あること。次下の歌小てあられより。○田部云々の六字、舊本小ハ无。元曆本拾穂本等小従つ

ワギモコヲアヒシラシメシヒトヲコソソコヒ
吾妹兒矣。相令知人乎。許曾戀

ノマサレバウラメシモヘ
之益者恨三念。

モレシシモヒト
相令知人トハ、もどめ女の媒して、相知せし人をいふなり。契沖ガ、なるごちあどいふふハ、
ハあらば、と云るハ、こころし。○許曾ハ、他小むる

へて、その物をえり出て、るゝのふいふとき、の詞なり。
○恨三念ハ、恨しり念へといふ意なり。この三の辭ハ、
一格なり。既く具云里。○歌意ハ、あまり小妹と離るゝ
ことのもて、なく、かなし、さのまさるふつきて、もどめ
より相知ぎ、他人小てあらまゝのバ、かゝるつらさハ
あらぶをととて、もどめ仲媒せし人をこそ、恨めしうな
るへと
なり

アサヒカゲニホヘルヤマニテルツキノ
朝日影爾保蔽流山爾照月乃。

不厭君乎山越爾置手。

本の三句ハ朝日影のかつぐさゝをえて艶へる山小
在明月の照る景色のあぢかきと云て不厭
をいむ料の序とせり。不厭君乎厭字拾穂本小ハ
相見る度小愛くて常厭ざる君あるものといふな
り。これも右の千年をさして云るなるべし。上小ハ妹
といひこゝ小ハ君と云れど別人小ハあらざるべし。
又千年ハ櫛子が本妻小てハあらざるべし。○山越爾
置手ハ契沖かくいひをてぬやうなる小かざりあき

意こも里ていをぬがいふ小まさるなりと云り。今世
の常の語もあることなり。十一三十小往而見而來
者戀敷朝香方山越置代宿不勝鴨とあり。○歌意ハ相
見る度小愛くて常小厭ぢ思へるゝ君なるものを山
越小遺し置て遠く別れ行むと
思ふがいと悲しき事となり

柿本朝臣人麻呂歌四首

三熊野之浦乃濱木綿百重成

心者雖念直不相鴨。

三熊野ハ紀伊國牟婁郡熊野小て名高シ。三ハ御吉野の御小同ゾク美稱ナリ。真熊野とも云リ。○濱木綿ハ草名。俗小濱おもととも濱芭蕉とも云里。其莖の皮幾重も重れるものなる故小。百重成と云む料小設て云るなり。契冲ガ今案小。濱ゆふハ浪。あやこの草のこと。品物解小具云。六帖小見くま野の浦の濱ゆふ幾重我をバ君ガ思ひへどつるとあり。忠見集小。三熊野の浦のえいくへつ。○百重成。治字本小。重の上小。ハ。百重のみてかへらむ。ニ。字あるハ非ナリ。

如く小と云むが如く。成ハ如くといふ意の辭ナリ。十ニ七小。吾戀者夜晝不別百重成情之念者甚爲便無ともあり。○直不相鴨ハ。二。卷小。賀欲布跡羽目爾者雖視直爾不相香裳とあり。○歌意ハ。濱木綿の皮の百重小も重れるが如く。いとあげくこづらハ。く思へども。さばのり思ふのいもなく。直小相見ることもなく。いとあましく思え。る。事哉となり。

古爾有兼人毛如吾歟妹爾戀

乍。宿不勝家牟。

ツ、イ子カテニケム
アゴトカ
如吾歟ハ、吾が如く小やの意なり。七卷九小詠葉古爾
アリケムモアゴトカミヤノヒハラニカザシラリケム
有險人母如吾等架彌和乃檜原爾挿頭折兼とある小
本、句ハ全同ド。○宿不勝家牟ハ、寐難小けむなり。難を
不勝と書るハ、夕へズといふ意をとれるおれば、難き
と同意小おつめり。契沖可かて小ハ、かさぞといふこ
とし、かさぞハ、あへど、あへどといふ小同ド心なり。難
の字をかきて、いねあてといふ小ハ、おもれり。と云る
ハ、まぎらえし。○歌意ハ、古小ありけむ人も、吾妻戀を
既く具、云里。○歌意ハ、古小ありけむ人も、吾妻戀を
る如く小や、夜も寐難小けむされバ今のみ、の行事

イマノミノワザニハアラズ、イニシハヒトソマサリ
今耳之。行事庭不有古人曾益
テ子ニサヘナキシ
而哭左倍鳴四。

哭左倍鳴四ハ、子ニサヘナキシと訓べし。○歌意ハ、古
人そ、吾小益里て、哭ふさへ泣て妻戀せしなれば、今の

みの行事小ハあらざされバ今人の妻戀するハげ小
 りべなる事となり上小ハ宿難小けむとおるめ
 していひ今ハ哭小さへ啼しとき
 ぞめ云ていよく自慰むるなり

百重二物來及毛毳常念鴨公之

使乃雖見不飽有武。

百重二物ハ使の間繁く百度小もの意なり○來及毛
 常字活字本小ハキシカヌカモトと訓べし及ハ彌
 無ハこるし

頻々小重る意なり志加奴といふハ奴ハ不字の意
 望辭の禰の轉れるなり有ハ逢ハと望ふ意と有
 奴可毛逢奴可毛おと云る例ふてこハの意をこきま
 へつべしさて及の一字ふてハシカヌと訓べのらね
 バこハ字の脱するものとも云べけれどねがふ
 意の奴の辭ハ省きて書る例集中小多し七卷八丁小
 青角髮云々人相鴨十卷十三小霞發云々妹相鴨又十二
 丁五月山云々又鳴鴨ま霍公鳥來居裳鳴香十一丁五
 小我勢古波云々人來鴨又日低者云々有與鴨又二十
 如是爲乍云々有鴨又二十丁敷細云々急明鴨これら皆

奴ヌの辭コト小コあハる字ジをシ畧リヤクきて書シ。古コ來ライこの及キ毳モをホ
 ハ古言コト小コ疎ス。本居ホンキ氏ノのシケカモとよめるハ及キの訓コト
 ハハよるハけれども有レをアレカモ逢ヒをアペカモハど
 云クべき語格ゴなけれババ毳カモハ哉カモの借リ字ジなり和名抄ワナヒノシ小コ野
 王ノ曰ク毳カモ毛モ席セキ然シテ毛モ爲ル席セキ也ナリ和名賀ワナヒノカモ毛モ字ジ鏡カモ小コ毳カモ加カ毛モと
 あり毳カモ字ジも毛モ席セキ小コて件等ケントウの字ジ皆ハ同物ドウモノ小コして加カ毛モ小
 れバ哉カモ小コ借リて書シるなりさて公キミの使ツケの頻シキリク屢シ來キよの
 一ヒトとの意イなり○念オモ鴨カモハ念オモへむのハもといふなり母ハ
 歎ナクシ息キ辭コトなり念オモへむ小コや嗚アハレ呼レ云ク々の意イなり○雖レ見レ不レ
 飽ウレ武ブ武ブ字ジ舊本キウホン哉カモ小コ誤ルれり類ルハシレドアカザラムと
 訓コトべし○歌ウタ意イハ間マ繁シく百遍ヒャクヘン小コも重オモシ々シ小コ繼ツグて來キよの

一と思バ小や公の使の愛しく嗚

呼見れどあおげあるらむとなり

碁檀越往伊勢國時留妻作

歌一首

碁檀越ゴノダムヲチガユク碁ゴ字ジ目録メロクまマ古本コホンハ碁ゴと作スり碁ゴハ氏ノ檀越タンエツハ名ナカ
 るべしシ按ハ碁ゴハ圍碁イハヒの業ノを善ニせしむるハ里ノて呼フなせ
 る類ルふても傳ツ未ダ詳シならび此ノハ俗人ソクジン小コて
 久米クジメ禪師ゼンシおど同類ドウルイのハりるさき名ナなり

神風之伊勢乃濱萩折伏客宿

也將為荒濱邊爾也

濱萩ハ即海濱小生さる萩ふて濱藻濱松あどいふ類
ふて別種の萩を云ふハあらざるべし萩ハ品物解小
云里○歌意かくれさるところなく吾夫の旅宿をお
もひやれるさま最可憐なる歌あり新古今集あい
れとおがめ来て浪小折しく伊勢の濱萩全今の
歌ふよれり

柿本朝臣人麻呂歌三首

未通女等之袖振山乃水垣之

久時從憶寸吾者

未通女等之袖といふまでハ振山をいむ料なり十
二小ハ石上袖振河之とあり又登能雲入雨零河之と
もよめり此餘小吾妹兒爾衣借香之まよ吾妹子乎聞
都賀野邊能まよ梓弓引豊國之まよ舊衣著櫛之里之

續後紀長歌小旅人爾宿春日奈流などある。みな此類の云つゞけなり。○振山ハ大和國山邊郡石上といふ地小布留御魂社あり其處なり古事記中卷小建御雷神答曰專有平其國之横刀可降此刀名云佐士布都神亦名云甕布都神亦名布都御魂此刀者坐石上神宮也。神名帳小大和國山邊郡石上坐布留御魂神社ふど見えさり。○水垣乃ハ水ハ美稱小て神社の御垣を不めて云里神代紀小瑞宮とある美豆小同トさてこれまでハ久時といをむ料の序なりさてかく序をおける意ハ契冲云下河邊長流の枕詞燭明抄小みづかきの

久しき世といふことハ舊事本紀云磯城瑞籬宮天皇御宇布都大神社大倭國山邊郡石上邑移建天璽瑞寶同共藏號石上大神以爲國家爲氏神云々志のれば布留の社ハ瑞籬の宮の御宇小多てられて我國小てハ神社のをとめとを依て布留の社ハふるき事小別てよめ里ふるの社の神垣をもて皇居の瑞籬の宮小相兼てみづあきの久しき世といよめるありと云り。已大のこの意ハまづかくの如し。但し神社のをとめとの瑞籬宮小相兼さりと云るも共ふころし。さて志あらば振山の水垣小限里ていふべき小十三丁二小栞垣久時從戀爲者云々

とあるハ、いづれそやあるを、小從て、おほ熟考ふ
 了、彼、十三なるハ、柿本朝臣人麻呂歌集歌曰とて、長
 歌短歌ありて、其次下小治田之云々の長歌又反歌
 ありて、或本反歌曰楮垣云々とあれど、小治田之云々
 の反歌のさまならど、引混て入しものと見ゆれば、こ
 れも本ハ、人麻呂歌集中の歌小て、さて今の未通女等
 之云々の歌小次て、同時小人麻呂の作れしものなら
 むと、昔より混乱しならむ、さてあかるときハ、上の
 今の歌小委ね省て作るものとさべし、この甚く強
 ることなるやうあれども、必志のありけむとおもえ

るなり。冠辭考小十三ある楮垣云々と崇神天皇の
磯城瑞籬宮のこと、瑞籬宮のといを、
 らど、若此、宮號ふつきていた、瑞籬宮のといを、
 言さらむ、水垣とのみ小てハ、宮號ふありおさる
 べしと本居氏云り、又同人、説ハ、今の歌ハ、人麻呂歌と
 ハ、あれど、人麻呂よりハ、古く聞ゆれば、水垣の久
 一きとのみよむハ、今の歌小委て省けるありと云れ
 ど、今の歌ハ、人麻呂のあることハ、いので、疑をむ
 ○久時從久の下、古寫一本小寸字あり、從、字活字本小
俊と作るハ誤
 あり、○憶寸吾者ハ、吾ハ思ひ深てけりと云なり、寸ハ、さ
 き小ありしことを、今あさるて小をハなり、○歌意ハ、
 今あらさ小をどまれること小ハあらば、遠く久しき
 時より、吾ハ思ひ深てけりとなり、十一丁寄物陳思處
 女等乎袖振山水垣久時由念來吾等者と載り、伊勢

物語ふむつまゝと君ハ知れや水垣の久しき世より
いとひ始てき金葉集小水垣の久しかるべき君の代
を天照神や空ふ知ら
むあども見えしり

夏野去小牡鹿之角乃東間毛

妹之心乎忘而念哉

本二句ハ牡鹿の夏の初小角をおとして其の生おそ
れるのいまごふけ短くて手一握むありあるをもて

いひのけしり○東間毛ハ志むらくの間もといふ意
なり二卷小大名兒彼方野邊爾刈草乃東間毛吾忘目
八十一三十九九十丁小紅之淺葉乃野良爾刈草乃東之間毛吾
忘渚菜金葉集小朝日とも月ともこのび東の間も君
を忘るゝ時しあければ現存六帖小人をいあでおも
ひこそれむ大原やこの市柴の東の間むありなど見
えしり○妹之心乎ハ妹ふことを心ふといふ意なり
○忘而念哉ハ忘れむやハ忘れぬの意あり念ハ軽く
添ふる辭なり哉ハ後世の也波の也
あり○歌意かくれしるところなり

珠衣アリキヌ乃ノ狹藍サ左井謂サ沉家井妹爾物シヅミ。イノモ。ニ。モノ

不語イハズ來而思キニテオモヒカ子ツモ金津裳。

珠衣ハ大町稻城云此歌十四二十三十丁小安アリ利伎奴乃佐惠サエ
佐惠之豆美云々サエシヅミと出テ全同歌なりさて十六八丁小ハ蟻アリ
衣之寶之子等之キヌノタカラノコラガとあるなどを合思へバ珠ハ蟻の字
の誤ホテアリキヌなるべし珠と蟻と草書似たりさ
て蟻ハ借字ホテ織衣オリキヌあり上つ代ホハ織衣オリキヌと皮衣と
ならべ用ひしあバ皮衣ホむあへて織衣とハ云なり

鳥けごもの皮もて衣とせしハ古事記ホ故大國主
神坐出雲之御大之御前時自波穗乘天之蘿摩船而内ハギニヒレノカラハギシテキモノトヨリクルカミ
剥鵝皮剥為衣服有歸來神云々此者神産巢日神御子ヌクナビコナノ
少名毘古那神書紀應神天皇卷ホ於是天皇西望之數ニシタカヲサケキハアマ
十麋鹿浮海來入于播磨鹿子水門天皇謂左右曰其何タノオホシカヨリ
麋鹿也泛巨海多來爰左右共視而奇則遣使令察使者オホシカヨリウミヨリムレクルハ
至見皆人也唯以著角鹿皮為衣服耳問曰誰人對曰諸ツメツキカノカラキモノトトヒシカバソクヌ申キ
縣君牛云々集中二卷三十丁小毛許呂裳遠春冬片設而ケコロモヲルフユカタマケテ
幸之云々イタシイこハけごもの毛を織ふる衣と思ふ入も
あるべけれどさふハあらむ今世までも行滕などホムカバキ

のさこくとさる心なりと云り。佐惠佐惠といふも同
ト。衣の音を云るハ。詞花集小志のいさる男の鳴ける
衣をのゝあましとておののけければよめる。和泉式
部音せぬへくるしき物を身小近くなるとていとふ
人も有けり。源氏物語初音小光もなく黒きかいねり
のさるくくたりする一かさねさるおり物のうち
きをさ給へるいと寒げ心くるしとある注小さる
さるくくハ。さやくと鳴意なりと見え。若菜小人々た
びえさこきてそよくとみしるささまよふけをいど
も。衣の音ない耳のしましき心ちきとも見えたり。
馬司

相如子虚賦。華蔡漢書音。さて古事記上卷小爲釣海
義小華蔡衣聲也とあり。マノオホクテノヲハタスキサ
人之口大之尾翼鱸佐和佐和邇控依騰而云々。佐和佐
和ハ。狹監左謂と同音小て。舟を海人どもの挽寄をと
て呼ぶ聲の喧く噪しきを云。此言下卷高津宮段大御
歌小もあり。と本居氏云里。ありきぬの清潔といふ意
つし云るなりと云説ハころし。上よりのつバ。沉ハ。十
きも。衣の聲のさこくとなるよ。おれバなり。沉ハ。十
四五小。佐須和奈乃可奈流麻之豆美許呂安禮比毛等
久とある。之豆美小同。別を慕ひて。家妹のさこくと
いひさあきあへるを。おしあづめてといふ意なり。俗
小鳴を鎮めてといふ小同意なり。○物不語來而ハ。モ

ノイハズキニテと訓へし。此歌十四三丁出さる小
 も。毛乃伊波受伎爾豆とあり。又同卷九丁小水都等利
 ノ多々武與曾比爾伊母能良爾毛乃伊波受伎爾豆於
 乃多々武與曾比爾伊母能良爾毛乃伊波受伎爾豆於
 毛比可禰都毛廿卷二十丁小美豆等利乃多知能己蘇伎
 爾父母爾毛能波須價爾豆己麻叙久夜志伎あどある
 小同一○思金津裳裳字活字本小津ハ思小堪あねつ
 もといふなり。金ハ不得カチなり。裳ハ歎息辭なり。○歌意
 ハ別を慕ひて家妹がささくといひさわきあへるを
 おしあづめていふべきことをいをげこられ來て
 今更思ひ小堪あさくしてさても悲しき事哉となり。此

歌十四三丁相聞ふ出で末句毛乃伊波受伎爾豆於毛
 比具流之母本句ハとあり。歌左注小柿本朝臣人麻呂
 歌集中出見上己記也とあるハこゝをさせり。彼歌集
 小ハ自のをも他のをも聞小まかせて載さるものと
 見ゆれど今の歌ハ信小彼朝臣の詞氣なれば
 こゝ小云る如く自作なることさら小疑あし
 カキノモトノアツミヒトマロガメノウタヒトツ
柿本朝臣人麻呂妻歌一首
 此歌類聚抄小異本小坂
 上郎女とありと云り

君家爾吾住坂乃家道乎毛吾キミガヘニワガスミサカノイヘガウモアレ

者不忘命不死者ハワスラジイノチシナズハ

君家爾吾といふまでハ住と云む料の序なるべし古
女の許小通ひて宿るを住と云ること多し業平の有
常の女小住しなど云る類なり古今集戀題詞小右の
大いまりち君住む成小ければあの昔おこせさりけ
る文どもをとりあつめてかへきとてよみておくり
ける云々離別左注小この歌ハある人つゝのさ給えり

てあさらしき妻小つきてと一經て住ける人をまて
て云々枕冊子小このもしき物いみり志とて、聳
とりさる小いくやとなく住ぬ聳のさるべき處など
みてありと小あひさるいとや思ふらむ新古
今集哀傷小年ごろ住侍ける女の身まのり小ける四
十九日をて、云々あどいと多く見ゆこれらハ皆夫
の婦の家小通婚をいへり婦の夫家小適さるをも住
と云事ありしや○住坂ハ神武天皇紀小天皇陟彼
菟田高倉山之巔瞻望域中時國見岳上則有八十梟帥
又墨坂置熖炭其墨坂之号由此而起也契冲此妻身ま

ろられける時人麻呂のなげきてよまれさる歌ふ天
 とおやかろのみちをばとぎも子可里ふ一あれバと
 いへり輕の里ハ高市郡墨坂ハ宇陀郡ふて高市郡の
 凡東ふあさりて其あひごをこ一隔さる一といへ
 り志あれども此人をかの天とぶやかるの路ハとよ
 まれさる女と定めむ事ハおろつるな人麻呂の妻
 と云る人既く辨へさる如く多くあ本居氏坂ハ誤字
 れバいづれとハきハめがさきをや墨坂
 あらむゑとまれかくまれ宇陀の墨坂とハ思えれど
 彼地ハ大和の東の邊地ふて京人の常ハ行のよふべ
 き所ふハあらざと云りをされど此女所由ありて墨坂
を過て人麻呂の家ハ適さる
 ことをいへるも知らざしきべて人麻呂妻と云る一
 人ふかぎらねバ何方の女とも定めおさし又遠き古
 のことなれバ墨坂を通いし由猶さらふ委く考よ
 縁も委くハ知らざしき事ハこそ猶さらふ委く考よ
 く尋ねさごめていふべ一〇家道ハ家の方ふゆきさの

よふ道を云住坂の家ハかよふ道と云ハ非ぞ君 〇
が家ハかよふ住坂の道路の謂なり
 吾者不忘者字活字本ハ死ハ神代紀彦火々出見尊御
 歌ハ伊茂播和素羅耳古事記ハ和須禮士とあり禮
と云ても良といひてもおなド
こととあり 〇命不死者ハ生てあらむるとハといふ
イナチシナズ
 意なり命死と云るハ雄畧天皇紀歌ハ伊能致志儺磨
 志とあり 〇歌意ハ命終さらば志らび生てあらむ不
 とハ君の家ハ吾過て適一住坂の道を
ニキ
 さへも吾ハ忘れドといふおるべ一
ア ミ イ ラ ツ メ ガ ウ タ フ タ ツ

安部女郎歌二首

安部、女郎 目錄ふハ、阿ハ、三、卷小、阿

倍、女郎とあると、同人なるべし

今更何乎可將念。打靡情者君

爾。縁爾之物乎。

本、二句ハ、十卷 五十 小、道邊之乎花我下之思草今更爾
何物可將念とある小同ト、十一 二十 小、云云物者不念
斐太人乃打墨繩之直一道二とよめることろむえな
り○打靡ハ縁と云小繋れる詞なり○縁爾之物乎ハ

下 二十 小、天雲之外從見吾妹兒爾心毛身副縁西鬼尾
とある小同ト○歌、意ハ、心ハ君小一をぢ小打あびき
縁小一ものも今更小何

事とのハ思をむとなり

吾背子波物莫念事之有者火

爾毛水爾毛吾莫亡國。

事之有者ハ、十六 十一 女子贈與其夫歌小、事之有者小
泊瀬山乃石城爾毛、隱者共爾莫思吾背とある小同ト

之ハその一もぢ小志あることとをなほ思はる助
辭あり○火爾毛水爾毛ハ契冲云第九見菟原處女墓
歌小水小入火小も入むと立向ひ云々敏達紀云足食
足兵以悦使民不憚水火同恤國難延喜式廿八兵部式
云凡武藝優長性志耿介不問水火必達所向勿顧死生
一以當百者並給別祿と云るの如し○吾莫亡國アレナクニクニ亡ニ舊本七
誤ハ吾無らなく小の意小て吾あき小てハなく吾有
ものとの意小落著詞なき既く一下九廿小出○歌意
かくれさる
ところなり

駿河妹女歌一首

駿河妹女スルガノウチベガウタヒトツ
妹字活字本小妹傳未詳ならび八卷十四小
ハ駿河采女と書里采妹通し書ること古書小例多し

玉篇小妹采

女也とあり

敷細乃枕從久久流淚二曾浮

宿乎思家類戀乃繁爾

枕マク從ユ久ク久ク流ルハ枕マクを泳ユるといふ意イなり從ユハ例レの乎ヲの
辭コト小コ通トウ不フ從ユなり○歌カ意イかくれナし古今集小コ淡川枕
流ルし浮宿小コハ夢ユメもさサぶブの小見
えエむムをありアりリけるケるとよめる類ルなり

三方沙彌歌一首

衣手コロモテ乃ナ別ワカル今コ夜ヨヒ從ユ妹毛イモモ吾母アレモ甚イタク

戀名コヒムナ相因アフヨシ乎ヲ奈美ナミ

衣手コロモテ乃ナ別ワカルとハ身ミを相副アハするルの別ワれるレハ衣袖コロモの相離アハ
るル故ユ小コ云イるルなり集中小コ多タき詞コトなり○妹毛イモモ吾母アレモ
活字本カクシハハ物モノニニッッを比ヒべて同等小コ志シありとある時
母ハハと作りツクハハ物モノニニッッを比ヒべて同等小コ志シありとある時
小コいふ詞コトなり○戀名コヒムナハ名ナハ歎ナガメの意イをふフくクめる助辭
なり俗ソコ小コあアと下シタ小コ君キミ之ノ去イナ者ハ吾ワレ者ハ將キミ戀名コヒムナ七ナナ卷マキ
十六小コ家爾イニシ之ノ互テ吾ハ者ハ將キミ戀名コヒムナ十ジュウ卷マキ小コ左サ牡鹿シカ者ハ和
備鳴將ビナキセム為ナ名ナ十七ジュウイチ小コ花ハナ者ハ知良牟奈チラムナ古事記中卷歌
小蘇良波ソラハユカズ由賀受阿斯用ユカズアサヨ由久那ユクナ書紀仁德天皇卷歌小
和例鳥ワレヲトハスナ斗波輸トハスナ籬ナなどある小同コト○歌カ意イハ今イマまでハ
身ミを副アハてあアるルの遠トウく相別アハれてハ相見アハべきキよヨの

ふき故小妹も吾も同等小いしく戀

しく思ひつゝあらむをあとなり

丹比真人笠麻呂下筑紫國

時作歌一首并短歌

笠麻呂ハ三卷小出つ傳未詳あらざれば筑紫

小下れるもいつの時といふこと知べのらび

臣女乃匣爾兼有鏡成見津乃

濱邊爾狹丹頰相紐解不離吾

妹兒爾戀乍居者明晚乃旦霧

隱鳴多頭乃哭耳之所哭吾戀

流千重乃一隔母名草漏情毛

有哉跡家當吾立見者青琪乃

葛木山爾多奈引流白雲隱天
佐我留夷乃國邊爾直向淡路
乎過粟島乎背向爾見管朝名
寸二水手之音喚暮名寸二梶
之聲爲乍浪上乎五十行左具

久美磐間乎射往迴稻日都麻
浦箕乎過而鳥自物魚津左比
去者家乃島荒磯之宇倍爾打
靡四時二生有莫告我奈騰可
聞妹爾不告來二計謀

く添ふるのみなり○狭丹頰相ハ既く具云里此ハ紅
ヒモトキサケズ
 の赤紐を云り○紐解不離ハ十二三四小客夜之久成
バサニツラフヒモアケサケズコフルコゴ
 者左丹頰合紐開不離戀流比日とある小同じ婚合こ
アケグレ
 とのなき形を云るなり○明晩ハ夜の明をてむと
 てかへりてくらくなる時をいふ十卷三十小明闇之
アサギリガクリナキテユクカリハアガコフイモニツケコ
 朝霧隱鳴而去焉者言戀於妹告社拾遺集八卷小山寺
 小まかりける曉小日ぐら一の鳴侍ければ左大將濟
アサボラケ
 時朝朗日ぐら一の聲聞ゆありこやあけぐれと人の
 云らむとあり毛詩小昧且の字をアケグレと訓せ
朱熹注小昧且明也昧且天欲且晦明未辨
 之際也とあり世本晦明を昧晦と誤れり○哭耳子ノミ

之所哭ハ哭小のみ泣るゝ意なり之ハその一を
シナカユ
 るをいふ助辭なり五卷三十小雲隱鳴往鳥乃禰能尾
シナカユ
 志奈可由とあり○千重乃一隔母ハ二卷三十小吾戀
チヘノヒトヘモナグサムルコロモアリヤトカルイチニアガタチキケバ
 千重之一隔毛遣問流情毛有八等輕市爾吾立聞者七
ナガサヤマコトシアリケリアガモノチヘヒトヘモナグサメナクニ
 卷十九小名草山事西在來吾戀千重一重名草目名國
ナカタラチマヨヒ
 無足常間結など書ると同類な里既く二卷明日香皇
ナカマトアガキ
 女木屐殯宮之時歌小具云里○青旗乃ハ葛木山の枕
アラハタ
 詞なり旗ハ旗あさるハまづ青旗ハ綾織の義小やと

思をる、なり。和名抄、豊前、國榮、城、郡、綾、幅、郷、見、ゆ。さて古綾を青とも

通し云里かとおかをる、ハ、神代紀小吾屋惶根尊

亦曰青檀城根尊とあればなり。さて葛木とうけさる

意ハ、吾徒南部嚴男の持統天皇紀小華縵と見えてそ

の華縵をバ古綾羅の類もて造れり。ならむ。十二

丁小紫綵色之縵花八香。今日見人爾後將戀鴨。これも

紫色の織物もて製れる。華縵なるべし。故綾織之華縵

といふ意小つづけさるならむと云里。○天佐我留ハ

既一巻小出佐我と書るハ正一あらば。天射可留と書

り。○夷乃國邊ハ、四國邊とさして云里。夷のことハ既

く一巻小具注里。○直向ハ、夕。ム。カ。フ。と訓て、淡路と

いふへ屬て意得べし。タ。ム。カ。ヒ。と。よ。む。ハ。いと。こ。る。ハ。夷の國方小直

しく指、向ひある。淡路といふなり。十五十二小多太牟

可布美奴面乎左指天。此ハ自指向。ふ。を。云。里。○背向爾見管向字

ハ必あるべきを。舊本小ハ脱せり。三卷三十小繩浦從

背向爾所見奥島とある處小例どもを引て云里。同卷

小武庫浦乎撈轉小舟粟島矣背向爾見乍乏小舟これ

本ハ向字。○朝名寸二より下四句ハ、十三三十小も且

名伎爾水手之音為乍夕名寸爾梶音為乍誤字

とあり。○梶字拾穗本小ハ撈と作里。○五行左具

久美ハ五十八へ言小て、物をいひ出さ頭ふおく詞
 なり、左具久美ハ割見といふ小同、既く云里○射往
 回ハ射ハこれもそへ言小て、往めぐりといふなり○
 稻日都麻ハ播磨國印南郡の海邊なり、六卷十八小、伊
 奈美孀辛荷乃島之十五丁六小、印南都麻之良奈美多加
 彌とあり、都麻といへる意ハ未思得也、或説云、好忠集
 をものきさはせり春ごと小えりさ民の志わざなら
 一もとよめるささハ、近江の地名あり、さればつま
 ハ、其あさりといふ事のと云里、好忠集
 一本ハ、ささ津小とあり、猶考べし、○浦箕ハ、箕ハ
 借字回なり、母登保理を約めて尾と云る小て、浦のめ
 ぐりといふ小全同、既く具云里、畧解小、本居氏、説を
 載て、さへて浦回と

書ても、うらわと訓ハ、こゝろ、假字書皆うらまとおれ
 ハ、うらまとおむべし、こゝも、其まともと通へ、バ、則ま
 おりと云りとおれど、うら、○鳥自物ハ、浪漬傍の枕詞
 まと云る例こそあけれ、○鳥自物ハ、浪漬傍の枕詞
 なり、七、卷小、鳥自物海二浮居而云々、自物のことハ、一
 卷小云里○魚津左比、魚、字、拾穂本小、ハ、浪漬傍なり、既
 く云里○家乃島ハ、神名式小、播磨國揖保郡家島神社、
 大、名神、續後紀小、兼和七年六月甲子、播磨國揖保郡家島
 神爲官社、左馬寮式小、凡放播磨國家島御馬寮直移國
 放繫云々、本朝世記小、長保元年五月五日、云々、相次左
 右馬寮申請家島御牧駈嗣御馬、可附國宰事云々、此集
 十五丁十三小、伊敞之麻婆久毛爲爾美延奴などあり○

乎數而往而來猿尾。

妙字類聚抄小ハ細と作里○袖解更而ハ袖を解離て。
男女互小形見として行なりと本居氏云里凡て身小
著る物を取更て形見とまることハ古のあらえいな
里けむ十六ニ十オトノ小音之少寸道爾相奴鴨少寸四道爾
相佐婆伊呂雞世流管笠小笠吾宇奈雅流珠乃七條取
替毛將申物乎云々ともあり○月日乎數而ハ月日を
いつくと數計てといふなり十七小月日餘美都追と
あ里抑餘牟ハもと呼と同言小て幾許幾許と呼て等

計なり七卷小浪不數爲而十一小時守之打鳴鼓數見
者十三小吾睦夜等呼讀文將敢鴨古事記上卷小皆列
伏度爾吾踏其上走乍讀度など見ゆ○歌意ハ袖解交
して別來しほと筑紫小留らむ間程凡ていくふとの
月日を登るらバ還里來むともるとも小期トキをちざり
かをして出往てさて還里來まゝものをもさることと
もいをびして急ぎ立小をも今更悔し思ふ
となり即何のも妹小告に來小けむの意なり
幸伊勢國時當麻麻呂大夫

妻メノ作ヨソル歌ウタ一ヒト首ツ

吾ワガ背セ子コ者ハ何イヅ處ク將ユク行ラム已オキ津ツ物モノ隱ナバリ

之ノ山ヤマ乎ヲ今ケ日フ歟カ超コユ良ラム武ム

此レ歌ハ一ツ卷マ小シ出デる

至コト此レ小シ重コ載シる

ウカレメガウタヒトツ

草クサ嬢シヤウ歌カ一ヒト首ツ

草嬢ハ別府信榮云。娼婦カケメあるべし。さるハから籍カケ輟ケ畊ケ録キ小シ娘子シヤウ俗書也。古無之。當作嬢云々。娼婦曰花娘。達且又謂草娘云々と見えて。草嬢ハ草娘と書る小同カケトきを知べし。但しこの書ハ明陶九成と云し者の作カケるものにて。いと後世のことなれど。古より國クニひて。草嬢といひしことカケのありしことカケのありしから。此小もかく見えしるあるべし。さてから國クニひても。なべてハのくいひしことカケの失カケりしと。こづのカケ後カケまで。達且小傳カケ置カケていひしカケ稱カケなるべし。

秋田之穂田乃刈婆加香縁相

者。彼所毛加入之吾乎事將成。

穂田乃刈婆加ハ穂田ハ穂小出ある田を云ハ卷三十

小秋田乃穂田乎馬之鳴十卷四十白露者置穂田無

跡などあり刈婆加ハ刈ころをいふ十卷三十

秋田吾刈婆可能過去者十六末三十茅草刈草菊婆

可爾鷄乎立毛とあり本居氏説刈婆加とハ田を植

分て植も刈もさるなり男ふ女相まじりて其をを

内ものものよりあひ並びて物さる故ふかくツバけ
云りそのの事ハ今世も云ことふてあとへバツの
田を三ッ小こけて一を二を三を四と立て一は
より植をこめ刈をどめて二は三は四と植をさり
刈をさるこまると云り此説ハ此歌ハよくかな
ひて聞ゆれど右引る十卷十六卷歌ハ叶う
ければい○香縁相者ハ香ハそへ言なり催馬樂角総
小安人萬支也比呂波加利也左加利禰太禮止毛萬呂
比安比介利加與利安比介利源氏物語初音小竹川う
あひてあよれるまのさ又匂兵部卿小もと免子舞て
かよれる袖どもものなどありおるこのほあふも香と
そへ言とせる例多し既く云里○彼所毛加ハそれを
ものなり加ハ車將成の下へめぐらして意得べし○

吾乎事將成ハ。事ハ言ふて。人の吾をかふのく小言さ
 わのむのの意なり。七卷三十小山跡之宇陀乃真赤土
 左丹著曾許裳香人之吾乎言將成とあり。歌意ハ打
 群て互小秋田を刈間ほひ。我思ふ君小寄相バ。それと
 も人のかふのく小吾をいひさあむのの意あり。契
 の穂ふ出ある稻のあびきあふごとく。よりあまはと
 よせて云里と云るハあらド。刈婆加と云れば。やめて
 まこと小縮
 をかる間を
 云りとこそ
 きこえあれ
 シキノミコノミウタヒトツ

志貴皇子御歌一首

大原之。此市柴乃。何時鹿跡吾
 念妹爾。今夜相有香裳。

大原ハ二卷十二小出で彼處小云里。十一二十小見
 現存六帖。人といふのでおもひこまれむ。市柴
 大原や此。いちのつあの間をあり。○市柴
 下。類聚抄活字本等小ハ八卷五十小。天霧之雪毛零奴
 原。字あるハ。イッニフマラミ。五十丁。小。道邊乃五柴
 可灼然。此五柴爾零卷乎將見。十一四十小。道邊乃五柴
 原能ふともあり。さて柴ハ借字類草なるべし。後世の
 字を用るものこれなり。和名抄小。菜。そハ六卷四十小。
 草一名類草。和名之波と見えり。

道之志婆草類草長生爾異梨とありて、十一一四丁小道
之柴草不生有申尾とあるをも併考て柴ハ類草の借
知べし。さて市も借字ふて伊都イツふ里右の八卷十一卷
などふ五と書るふて知べし。さて市を伊都イツ借るハ
足乳根と足常など書る類ふて轉用あるなり。ふ其
例ハ既小具云里かくて五と書るもなる借字ふて實
ハ五十津ふるべし。類草の繁多く生並あると五十津
類草といふべし。凡て物の繁く多きを五と十との數
ふていふこと古のつねと見ゆるなり。その五十イ槻百
枝エ五百枝千枝など云る類なり。これらハ其定數とい

ふときとハかをりて、多々繁く多きを云るふて實ハ
五十とも百とも五百とも千とも云る皆同ジ意なり。
五十津と津の助辭をおくハ百津鳥五百津楓おどの
例なり。かくて五十津某と云る例ハ此上小河上乃伊
都藻之花乃これを五百津藻と云説ハ甚こるし。五廿
卷一三丁小和加津乃以都母等夜奈枳語門之五十津
らの伊都と昔來イなどあり。これらふておもへば一巻
人皆意得誤れり。などあり。これらふておもへば一巻
の五可新も五十津イ樞ふて五百津椿おといふごとく。
枝葉の繁茂くさのえあるをいふのともおもたる
なり。但しかれハ書紀小嚴イ樞とあれバ其字意ふてあ
るべくやあらむ。その既く云り柳イこの五柴古來

くさぐさの説どもあれど皆論不足其の中契沖あ
 ぶら柴粟柴などいふ如く櫛柴ゆていちいの木の柴
 をいふると云るハいさゝあよきふ似るれど伊知比
 を伊知とのみいふまどく且道邊まゝ原などふよめ
 るも類草なら○何時鹿跡鹿字舊本庶ハ何時の相む
 での心ゆあび○何時鹿跡鹿字舊本庶ハ何時の相む
 との意な星之の助辭ハその一をぢをおもく云る辭
 なりハ卷三十七夕歌小秋風之吹爾之日從何時可登
 吾待戀之君曾來座流と見えり○御歌意ハ何時
 の相見むと待遠小戀しく思ひ妹小おもをびも今
 夜うれしくあひする哉となり契沖云續古今集ハ
 大原や此いちるむの
 こよひあ
 いぬると
 載られ
 たり

阿倍女郎歌一首

吾背子之盖世流衣之針目不

落入爾家良之奈我情副

吾背子ハ中臣東人をさねなるべし次小も東人とこ
 の女郎と贈答ある歌あればなり○盖世流ハ著賜へ
 ると云の如し著を盖世流といふハ見を賣世流とい
 ふと同格なり賣世流ハ見賜へると云意なるの如し

これ古言伸縮の法なり。されば著世流見世流などいふは、みな他のりへを敬ひていふときのこと小かぎりて、自のこと小いひることなり。著世流といふと、見世流といふと、見多流といふとの類は、みな自他小見せ流といふと、見多流といふとの差別あることなるを、つきて敬ふと志あらざるとの、混雑小意得來れるハ、古言小愈忽なり、古事記倭建命御歌小、那賀邪勢流意須比能須蘇爾云々、此集十六七丁小、伊呂雜世流管笠小笠などあり○針目不落ハ、契冲云、おちぢハ、一夜も落ぞといふ小おなぢ、志げき針目ごと小、この心の入なり、古今集小、あゝざりー袖の中、小や入小けむ、吾魂のなきこと、ちをる、又心ハ君の影

となり小きとよめる小おなぢ○家良之の下小、奈の那の字あるべきの、舊本小ハ脱あるなり、この奈ハ、歎息の意を會める助辭小、て、俗小なあと云が如し、集中小、まぎらえーも奈、音高ーも奈、水をもまへ奈、諾奈、諾奈などよめる奈なり、古今集小、老小けらー那、あと、後々小も多ー○我情副ハ、副とハ、もとよりある事の上小、事の副、里るをいふ言なり。俗みまでと云が如し、下二十四丁小、心毛身副、縁西鬼尾とあり○歌意ハ、吾夫の君の著給へる衣の、志げき針目ごと小、漏ぢ、我心までが入てあるらーな、あされば身こそ此方小、あれ心ハ何時も

君の身を放れど、あが

ひてあるよとなり

中臣朝臣東人贈阿倍女郎

歌一首

東人ハ續紀云和銅四年四月壬午正七位上中臣朝臣
東人授從五位下養老二年八月庚戌爲式部少輔四年
十月戊子從五位上中臣朝臣東人爲右中辨神龜元年
二月壬子正五位下三年正月庚子正五位上天平四年

十月丁亥兵部大輔五年三月辛亥從四位下三

代實錄九云故刑部卿從四位下中臣朝臣東人

獨宿而絶西紐緒忌見跡世武

爲便不知哭耳之曾泣

絶西紐緒ハ綻裂て斷離れ一紐をといふなり緒をて
小ををの乎なり紐之緒小廿卷三十小奈爾波治乎由
伎豆久麻豆等和艺术毛古賀都氣之非毛我乎多延爾氣
流可母之緒なり○忌見跡ハ忌々一からむとての意

なりこの見ハ引者難三跡など云る三小て既く云り。
忌ハ忌憚イハシシカサ一きをいふ既小具云里〇歌意ハ凡て紐ハ
この遇配アヒシレる嬌ツマならでハ緒著ムツケ一むべきものならぬと。
今ハ離居て妹のあらねばも一や他人などをして著
志めバ忌憚一からむさりとてまゝ縫裂て斷ふ一紐
をそれならふあらむもくる一ければいふ小とも
せむまべなくて一をぢ小哭のみを泣つゝそ居ると
なりこれハ旅など小ありて女郎小離居て作て贈
れるなるべし十二十五小針者有杼妹之無者
將著哉跡吾乎令煩絶紐之緒とあり考合べし

阿倍女郎答歌一首

アガモタルミツアヒニヨレルイトモチテツケ
吾以在三相二搓流。綵用而附。

テマシモノイマソクヤシキ
手益物。今曾悔寸。

ミツアヒニヨレルイトミスガ
三相二搓流ハ綵三線をより合せしるを云孝徳天皇
紀云始我遠皇祖之世以百濟國爲内官家譬如三絞之
綱中間以任那國屬賜百濟〇附手益物ハ堅く結著て
まゝものとの意なり物ハ物をとモノモノいふと同意なる五

卷ニ十ノ小ノ阿摩等夫夜等利爾母賀母夜美夜故摩提意
ク利マ摩ラ遠シ志テ豆ト等ビ比カ可ヘ弊ル流モ母ノ能ノ十三ハ八ノ小ノ公キ奉マ而テ越ラ得エ
シ牟ム物モノ古コ事シ記キ履レ中チ天テン皇ノ御ミ歌カ小コ多タ遲ダ比ヒ怒ヌ彌ニ泥チ牟ム登ト斯シ
リ勢セ婆バ多タ都ツ碁ゴ母モ暮ト母モ知チ互テ許コ麻マ志シ母モ能ノ泥ニ牟ム登ト斯シ理リ勢セ
バ波ハ雄ユ略リ天テン皇ノ御ミ歌カ小コ加カ那ナ須ス伎キ母モ伊イ本ホ知チ母モ賀ガ母モ須ス岐キ波ハ
ヌ奴ル流ル母モ能ノこれらの母能皆同ノ〇歌意ハ君ノ別去て
 出立時三ツあひふかコくよクれたるル絲シを以て何時イ時までマでも
 綻裂ヒまドくク著シてあラまシるルものと今更悔ク思ハ
 るトと
 なり

大納言兼大將軍大伴卿歌

一首

オホキ兼ハカケタルト訓ベ伊勢物語小今夜ゴ小人ホ志ツづ
オホキめてイいとくクあハむト思フ小國の守齋宮のノのみか
オホキけスるカ里の使ありときキて夜ト一ト夜酒飲シければ
オホキ云々大和物語小童コふて殿上ノて大七トと云ケるを冠
オホキして藏人所小ホありてかねの使かけて親ノもと小
オホキく小なむ有ける云々ハあラくク石物語小かクるをと小

右のおとゞのふまふ老もてゆくまゝ小衛府つゝのさ
るへびこのう花やのなるこのとこの職ふてなむ
さへありとてかけ給ひつる大將大納言ふゆづり給
ひぬ云々ふどありの大伴卿ハ安麻呂卿なるべし安
麻呂卿の傳ハ既く二卷上小委云里續紀小和銅七年
五月朔大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨と
見え

こり

カムキニモテハフルチヲウツタヘニ
神樹爾毛手者觸云乎打細丹。

ヒトヅマトイヘバフレヌモノカモ
人妻跡云者不觸物可聞。

神樹ハ何ふまれ神の領賜ふ木なり神杖など云る類
なり。舊本小サカキとよめるハころし。さのきとてハ
と本居ウツタ○打細丹ハりちつけふやぶての意なり。又ハ
氏云りカムキとへ小といふ意小も通へり。此下五十小打細爾前垣
乃酢堅欲見將行常云哉君乎見爾許曾十卷九小打細
爾鳥者雖不喫繩延守卷欲寸梅花鴨土左日記小揖取
はりつゝへ小我歌のやうなる事云ふもあらざ云々
りつゝへ小忘れなむとふハあらでこひしきこち

あをーやをめて。又もこふるちからふせむとなるべ
 一蜻蛉日記ふりつゝへ小秋の山へをるづね賜ふ小
 へあらざをけ里忠見集小春雨ハ零初ふ一の打細小
 山を緑ふなさむとや見一歌林良材集ふりつゝへ小
 あまこの人はありと云どこきて我一も夜獨宿源氏
 物語蘭卷ふりつゝへ小思ひもよらでさり賜りふれ
 べ御手をひきりごかーあり云々これらりちつけ小
 やがての心なりと云り○可聞拾穂本小ハ可波と作
 里これハ○歌意ハ神の領賜ふ樹ハ甚も忌憚りきむ
 のなごら下小味酒三輪之祝我忌杉手觸之罪歎それ

さら事小あさりてハ手を觸ることもあるものなる
 と人妻と云べりちつけ小手を觸ることさへ叶もぬ
 もののなと數
 き賜へるなり

石川郎女歌一首

イシカハノイラツメガウタヒトツ
 石川郎女ハ元曆本類聚抄古寫本等注云即佐保大伴
 大家也とあり安麻呂卿妻内命婦オホバ邑婆なり大家ハ夫
 小おくれある婦を尊みて呼ふせる名なるべ一家ハ
 姑と通ふるべ一もとあるこ一後漢書を作了班
固の妹を曹大家と呼さり家本音姑

或音加誤と注
りさりこれよ
りたどまれ
るふるべし

春日野之山邊道乎與曾理無

通之君我不所見許呂香裳

與曾理無ヨソリナク與字元曆本小於ハ隨身もなく唯獨通ふ意
なるべし與曾理ハ依隨ふ者の意なるべし十四十二
小和爾余曾利波之奈流兒良師十三ニテシ小荒山毛人アラヤマモヒト
師依者余所留跡序云などあるも余曾留ハ同言なり

○歌意かくれよ
るところなり

大伴女郎歌一首

大伴女郎ハ元曆本古寫本等注ハ今城王之母也今城
王後賜大原真人氏也とあれハ今城王の父君の妻な
り志かれども今城王ハ集中ハ見えざるのみハ傳
詳ならざれば妻も某の女といふこと知のべし但し
旅人卿妻大伴郎女と同人ならハ初今城王の父君ハ
嫁て今城王を生夫君ハおくれ後旅人卿ハ再嫁れ

のの

雨障アマツミ常為公者。久堅乃。昨夜雨アノ

爾ニ將懲鴨コリニケムカモ

雨障ハ雨忌アマツミして家内小隠里居るを云障ハ十八三十三
小夜夫奈美能佐刀爾夜度可里波流佐米爾許母理都ツムトイモニツゲツヤ
追牟等伊母爾都宜都夜ツムトイモニツゲツヤかげろふ日記おかくて中々
とあるつゝむなり。雨サハリとよめるハころゝ次
歌の雨乍見お同ドけれバあり

八卷ハ一四十十雨障出而不行者云々アツミ十一三十雨乍見アツミ
留之君我此下トリスシキミガ一四十十石上零十方雨二將關哉イソノカミフルトモアツミニツツヤ
都々美も同ツツ都々美も後世ハつゝおとのみ云
のこツツとふハあらば源氏物語東屋ツツおやましまして
あさツツらツツとツツ思ふ旬官ふことツツおなツツくツツてツツ我ツツ身ツツふツツつツツゝツツあ
るこツツちツツちツツるツツもツツあツツいツツならツツばツツ今昔物語ツツおツツこツツがツツ身ツツもツツあ
それツツなくツツ従者ツツをツツもツツかツツくツツしてツツつツツゝツツおツツなツツくツツ過ツツおツツけるツツ云
云ツツ醫師ツツハツツつツツゝツツおツツあツツくツツ京ツツおツツ上ツツ著ツツしツツけツツりツツなツツどツツ見ツツゆツツこツツハ
此ツツおツツ用ツツあツツきツツこツツとツツあツツおツツらツツことツツ○久堅乃ハ下ツツの雨ツツとい
のツツつツツいでツツおツツいツツふツツのみツツなりツツ○久堅乃ハ下ツツの雨ツツとい
ふツツへツツ係ツツるツツ枕詞ツツなりツツ○昨夜ハツツキツツソツツとツツ訓ツツべツツしツツ伎ツツ曾ツツハツツ二
卷ツツ小ツツ云ツツ里ツツ六帖ツツおツツハツツよツツむツツべツツの雨ツツおツツとツツありツツ
此ツツ下ツツ五ツツ十ツツ八ツツ

歌をも。六帖のハ。うむ玉のよむべの歸るとあり。よむべといふ詞ハ。土左日記のよむべのとなり。よむべあり。されどよむべといふハ。今、京よりこな。○歌意ハ。さの詞とおもをれり。古言ハ。あらド。常小兩障と。賜ふ君なれば。必て昨夜の雨小懲て。今夜ハ來座ぬならむ。嗚呼さてもつれなき事哉となり。ノチノヒトノオヒテナソラフルウタヒトツ

後人追和歌一首

追和。和字。舊本ハ同と作。今ハ。こハ右の歌の答の意ハはあらむ。唯兩障といふことのみを。和よめるなる

べー

久堅乃雨毛落糠雨乍見於君

副而此日令晚

落糠ハ。ふらぬのーとぬのふ意なり。既三

卷小具注。○歌意かくれ。るところなり

藤原宇合大夫遷任上京時

常陸娘子贈歌一首

宇合大夫の傳ハ三上二百十五丁小委注皇宇合ハ馬養の假名なり旅人タビトを淡等タビトと書ると同例なり。あられバ宇合ハウマカヒと唱ウマカヒべきなり。さて宇ハウマとは唱ウマカヒまじければ。宇摩ウマと書べきと。摩マを省けり。美作丹比ミサカノチヒかどの例なり。人名ハ葛野カドノを賀能カドノと書るなどなり。合ハカフの音あるを轉カヒして。カヒ小用ひるなり。フの韻とヒ小轉ヒ用あるハ。揖保雜賀イヒホサセカなどの例なり。○遷任上京ハ。續紀小養老三年七月。始置按察使常陸國守正五位上藤原宇合管安房上総下總三國ヲとありて。いふ一任四年ホト小して交替ありければ。養老六年の間小

やありつらむ。○常陸娘子ハ常陸國の女なるべ

一集中小播磨娘子對馬娘子かど云る類なり

庭立麻乎刈千布慕東女乎忘

賜名。

庭立ハ二ハニタチと訓べ。娘子ハ自庭小立てなり。

庭小殖ツとい。○麻乎刈千アサヲカリホシ半半舊本手小誤。ハ娘子ハ自ミか

ふ小ハ非ヒぢぢアサ類聚抄小從シキシヌラハ。娘子ハ自ミか

を業と云て。麻ハ布並キて千スものおれむ。やがて布慕シキシヌラの序とせり。○千載集十三小あさて不不あづまをとめ

とあるハ、今の歌あもとづけり。但しあり。○布慕ハ、重慕
さしてハ、舊本の誤あつきてよめるなり。○東女ハ、娘子の自我を云るなり。東男などもい
ふ類なり。○歌意ハ、今別れまゐらるる君の御りへを、
重々小思奉る東女の。我身はいやうけれども、情のま
ことをあわれとおぼして。
忘れ賜ふ事なわれとなり

京職大夫藤原大夫賜大夫

坂上郎女歌三首

京職大夫 類聚抄古寫本等小大ハミサトツカサノカ
と訓べし。職負令小左京職 右京職准左 管司一大夫一人
掌左京戸口名籍字養百姓。糾察所部貢舉孝義田宅雜
徭良賤訴訟市鄽度量倉廩租調兵士器仗道橋過所關
遺雜物僧尼名籍事。和名抄小左京職比多利乃美佐止
豆加佐。右京職美岐乃美佐止豆加佐。又云。長官本朝職
負令所載職曰大夫加美とあり。○藤原大夫ハ拾穗抄
小。或本小京職大夫藤原麻呂大夫云々とあり。類聚抄
古寫本等小。卿諱曰麻呂也とあり。麻呂卿ハ京職大夫
よりふよりて。後小京家と呼なせる是なり。續紀小

養老元年十一月癸丑授正六位下藤原朝臣麻呂從五位下五年正月壬子從四位上同年六月辛丑從四位上藤原朝臣麻呂爲左右京大夫神龜三年正月庚子正四位上天平元年三月甲午從三位同三年八月丁亥兵部卿從三位藤原朝臣麻呂爲參議十一月丁卯始置畿内惣管諸道鎮撫使從三位藤原麻呂爲山陰道鎮撫使同九年正月丙申詔持節大使兵部卿從三位藤原麻呂等發遣陸奥國七月乙酉參議兵部卿從三位藤原朝臣麻呂薨贈太政大臣不比等之第四子也懷風藻小從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣麻里五首一本麻呂と有里

ハ呂を誤れるなるべし○賜ハ集中の例贈と通書古寫一本拾穂本等小ハ贈とあり○大伴郎女郎字舊本拾穂本等小從つハ坂上郎女なり傳下

媿ヲトメ孀ラ等ガ之タマクシゲナル珠タマクシ篋ノ有タマシヒケ玉タマシヒケ櫛ノ乃ノ神家

武ム毛モ妹イモ爾ニ阿ア波ハ受ズ有アレ者バ。

神家武毛ハタマシヒケムモと今村樂の訓よりきささ
 らバ玉櫛タマクシ乃ノといふまでハ序小テ神魂消むもの意カ

り。毛ハ歎息辭なり。舊訓ハハツラシケガモとあるハ
いふハ足む。又契沖ガカミさびけ
 むもとなめる。○歌意ハ、吾思ふ妹小あをびておれば
 も、通えがさし。そのくるさふまひ消入むとあるふ。さてゆく
 ちをいき事哉となり。此歌六帖小末句いふの。今も
 妹小あをざれば。として入れり。又もと知らが玉匣か
 る玉櫛の。見るごといまはめづら。やきみとも見ゆ
 ヨクワタルヒトハトシニモアリチフヲイツノホト
 好渡人者年母有云乎。何時間
 ソモアガコヒニケル
 曾毛吾戀爾來。

歌意ハ、妹小逢ぎて、好堪て經渡る人ハ、一年の間ホトと
 も堪て在といふと、吾は妹小逢ぎるハ、いつむありの
 間ホトそ、差近き間あるを、それふも得堪ぎて、戀ホトくの
 み思ふ事ふ。嗚呼アハレさても辛アハレいやとなり。十三十三丁丁小年小年
ワタルマテニモヒトハアリナラフ
 渡麻豆爾毛人者有云乎と
 ありて、末句ハ全同歌あり

烝被奈胡也。我下丹。雖卧與妹
ムシブスマナコヤガシタニフセレドモイモトシ
 不宿者。肌之寒霜。
子ハバハタシサムシモ

悉被ハ古事記須勢理比賣命御歌小牟斯夫須麻爾古
夜賀斯多爾とあり本居氏此悉被を昔よりあつふま
まよめたるハ古事記の御歌小依小誤ふりと契沖云
りさて爾と奈と通へバ二句今と全同ト悉被ハ暖あ
るよしの稱なり凡てむきと云言ハ物とあふむる
の本義小て必しも甚熱くあるをのみ云小ハ非也然
ると契沖のむし被の稱ハ暖あること悉の如くなる
故小云といへるハ似あることなづら言の本義をき
はめむして悉字小をのりする末の意なり又裁縫の
様小依る別名あとも云れどさ小ハあらどと云り○

奈胡也我下爾ハ柔之裏小なり胡ハ清音なり濁るハ
さて今ならバ奈胡也可我といふべきを可と云ざる
ハ古言なり佐夜可を佐夜能杼可を能杼とのみいふ
小准ふべし○雖卧ハフセレドモと訓べし岡部翁の
ドと訓ハ甚○肌之寒霜ハ之ハその寒きことの一
たぢあるをおもく思はれる助辭母ハ歎息辭なり○
歌意ハ暖なる被の柔あるの裏小卧されハ寒き事ハ
あるまじき小女の柔膚小ハまさらびして猶一をぢ
小肌寒くのみ思はるゝハ
さてもくるゝやとなり

大伴坂上郎女和歌四首

狭穗河乃小石踐渡夜千玉之

黒馬之來夜者年爾母有糠

小石ハ和名抄小細石説文云礫也水中細石也和名佐禮以之字鏡小硝佐々良石又小石書紀小砂礫此集十四丁十一小左射禮思又一丁佐射禮伊思あどあり土左人筑紫人ハざれともあやれとも云り佐射禮ハ細

小の義小ハあらび佐射禮浪の佐射禮小同ト既クニ卷小注里○黒馬之來夜者ハクロマノクヨハと訓ベ
黒ハコクの音を用ふるコマあるべくさて夜
干玉之ハ下の夜と云へかされ
れどもあや三歌ハ十三丁小鳥玉之黒馬爾衆而
依ハクマあるベシ
これハ夜といふ言ふあけれバ又二十川瀬之石迹渡
野于玉之黒馬之來夜者常ニ有沼鴨今歌ハ此歌を少
○年爾母有糠糠字古寫本拾穂本ハ年中いつも常小
あらねありと希ふ意なり○歌意ハ佐保河の細石を
ふみこりて黒馬小衆つゝ吾許通來座む
ことハ年中いつも常小あらねありとな里

千鳥鳴。佐保乃河瀬之。小浪止。

時毛無吾戀者。

本句ハ止時無をいむ料の序なり○吾戀者者字舊本爾ふ誤元曆本古寫本アガコフラクハな里吾戀く思ふやうハと云意なり○歌意ハ君と吾戀く思ふやうハ晝夜志むらくも止息時かくなり

將來云毛不來時有乎不來云

乎。將來常者不待不來云物乎。

將來云毛云字拾穗本ハ言と作り毛字古寫一本小乎と作るハこる○歌意かくれらるところなり疊句體なり淑人乃良跡吉見而の類なり又十一二十小梓弓引見弛見不來者不來來者其其乎奈何不來者來者其乎とある

をも思合べ

千鳥鳴。佐保乃河門乃瀬乎廣。

彌ミ打橋ウチハシ渡須ワタス奈我ナガ來跡ククト念者オモハ。

瀬乎セラヒロミ廣彌ハ瀬ノ廣キ故ハ小ノ意ナリ。打橋ウチハシハ二卷小
出テ具云里〇奈我ナガハ汝ナガ之ナリ。歌意ナリ。歌意ナリ。歌意ナリ。

右郎女ミナモトメ者ナリ。佐保大納言サホノオノノミコト卿ノ之シ女メ也ナリ。初嫁ハツメ一品ヒトツツ穗積皇子ホヅメノミコ被カケ寵レ無シ儔ヒト而シテ皇子ミコ薨ニ之後ノチ時トキ藤フジ原ハラ麻呂マロ大夫オホウヂ姊アハシ之ノ郎ノ女メ焉ナリ。郎ノ女メ家イヘ於ニ坂ノ上ノ里ノ仍カレ族ツル也ナリ。氏ノ号イフナニ曰ク坂ノ上ノ郎ノ女メ也ナリ。

佐保大納言ハ安麻呂卿ナリ。此卿ノ傳ハ二上四丁小云里〇郎女ハ家持ノをハ小テ又ハ姑ナリ傳ハ三中七丁ハ小云里〇一品ハヒトツツハシナト訓べし。一品ハ一位ノ事ナリ。凡諸皇子ノ位階を一品二品などいひ諸王より以下を一位二位など云こと。文武天皇ノ御時サカヤより制サカヤれることナリ。和名抄小官位令云今案唐令有官品今本朝以レ位代一品二品三品四品品讀已上品讀為親王位階とあり。〇穗積皇子ノ御傳ハ二上八丁小委注里〇族字舊本小ハ歟と作里。今ハ古寫本小從つ但一偏ノ弓方ハ通一書ること。古書小例多一。

又マタ大伴坂上郎女歌一首オホトモノサカノヘノイラツメガウタヒトツ

佐保河乃涯之官能小歷木莫サホガハノキシノツカサノシバハナ

刈鳥在乍毛張之來者立隱金カリソ子アリツノモハルシキタラバタチカクルガ子

旋頭歌なり○涯之官ハ崖の高き處と云十卷キシノツササキシ六丁小
高松野山司之十七タカマノヤマツササノ十一丁小野豆可佐爾今者鳴良武宇ノツツカサニイマハナクラムウ
具比須乃許惠古事記雄畧天皇大后御歌小夜麻登能グヒスノコエ
許能多氣知爾古陀加流伊知能都加佐爾コノタケチニコダカカルイチノツカサニおどあり類

聚抄小ハ官を度と作キシノワタリとよめるハいか

のありむ○小歷木莫刈鳥小字類聚抄并異ハシバナ

カリソ子と訓べし契冲云小歷木を志をと點しる

はあひさきくぬ木ハ柴小かるゆゑ小心を得て志を

とよめるの管見抄小わかくぬぎとあるも心を得る

れどなありそといふことのおまればあやまれ里日

本紀小も歷木とかきてくぬぎとよめり今の俗くの

ぎといひてつるをみのなる木なりと云るが如し但

據をくぬぎの實とせるハいごことあり其由ハ品物
解小具云り現存六帖小高瀬さき佐保の河原のくぬ
ぎ原色づく見れば秋の暮のものとあるハ今の歌をこ
のくぬぎとよめる小よれるの又ハ小歷木の字小よ

りてよめ。小字を加て書るも、柴なるよしと知せある
 るものあり。小字を加て書るも、柴なるよしと知せある
 お里なる登木ハ、十二小、度會大河邊若登木とありて、
 品物解小云里、鳥ハ拾穂本馬小通して書り、即古寫本
 小ハ焉と作り、舊本小ハ鳥小誤れり、今ハ類聚抄小從
 つ、曾禰ソチといふ禰チハ希望、辭なり○在乍毛ハ、在々つ、
 もの意なり、三卷二十九丁小、在管裳不止將通とあり○張
 ハ春の借字なり○立隱金ハ、夫君と立隱て、竊會
 むぶ爲小となり○歌意かくれらるところなり
スメラミコトノタマルウナカミノオホキミニオホヒウタヒトツ

天皇賜海上女王御歌一首

天皇ハ、聖武天皇なり○海上女王ハ、官本小、志貴皇子
 之女也と注里、續紀小、養老七年正月丙子、授海上女王
 從四位下、神龜元年二月丙申、
 海上女王授從三位と見ゆ

赤駒之越馬柵乃緘結師妹情

者疑毛奈思

本二句ハ、緘結シメユヒといはむ料の序なり○馬柵ハ、馬塞ウマセな
 り、十四小、宇麻勢胡之、十二小、柵楮越爾と見ゆ、
宇マセコシニ
字鏡小
夫

世○緘結師ハ堅く契約をのをせしと云意をもの
せしるなり○大御歌意かくれしるところなり

右今案此哥擬古之作也
但以往當便賜斯歌歟

當の下古寫一本小時字有○源道別云擬ハ疑の誤往
ハ時の誤小て且當時とありの轉倒しあるならむ
さらバ疑古之作也但以當時便云々とありしなるべ
し十八小以古人之跡代今日之意まゝ十五小當所誦
詠古歌など
云る類なり

海上女王奉和歌一首

海上女王ハ元曆本類聚抄古寫本古
寫一本等小注云志貴皇子之女也

梓弓爪引夜音之遠音爾毛君

之御幸乎聞之好毛

爪引夜音之ハ隨身の夜の陣小て弦を引鳴る音なり
その弦音の遠く聞ゆるを以遠音といふむ序とせし

十九ニ八丁挽歌小梓ハ弧ハ引ハ夜音之遠音爾毛聞者悲彌
とあり○遠音爾母ハ遠キ御音信小もといふなりか
げろふの日記小帥殿の北の方尼小成給ひけりとあ
とふもいとあえれ小思り奉るとあり○君之御幸乎
ハ幸ハ事の寫誤小てキガコトヲなりと岡部氏
云里二卷十四小君之御言乎持而加欲波久とあり○
聞之好毛ハキカクシヨシモと訓べハ
甚つキカクハキクの伸里言ふて聞事をと云
意なり古今集戀小それと思ふ事とて吾やどを
不とぎり去年の一聲あるざり人のきあく小藤原元真集小
づをあらむなむなどあるもきあく小の伸里

大伴宿奈麻呂宿禰歌二首

宿奈麻呂ハ元曆本類聚抄古寫本等小佐保大納言第
三之子也と注せり此人の傳ハ二上二百十丁小委注里續
紀小養老三年七月備後國守正五位下大伴宿禰宿奈
麻呂管安藝周防二國とあれバその管國より女を官
流のへ小出せし時
ふよめるなるべし

ウチヒサスミヤニユクコヲマカナシミトシム
打日指宮爾行兒乎真悲見留

ハクルシヤルハスベナシ
者苦聽去者爲便無

マカナシミマカナシ
真悲見ハ真悲きの故ハの意ナリ真ハ美稱ホテ心と

云むの如ク悲テふ言ハ悲傷む意ホも憐愛む意ホも

云とてハ愛憐むかとなり七卷ニ十小ナ花以之哀

我手鴛取而者花散鞞九卷十九小ハ心悲久獨去兒爾屋

戸借申尾十四三三小加奈之伎世呂我和我利可欲波

牟又三十可奈思伊毛乎十五一三小伊毛我可奈思佐

廿卷三十三小可奈之伎吾子又四十小可奈之伊毛我多麻

久良波奈禮阿夜爾可奈之毛憐愛妹の手枕離ホ伊勢

物語ホひとり子ホさへ有けれバいとかなり爲賜

ひけりとあるかなりも同ド○聽去者ハ去ことを聽

きといふ義をもてヤルハと訓せり○歌意ハ宮づ

のへをとて京の方ホ出發女を心憐愛しく思ふの故

ホ國ホ留多くハあれどもそを心まホ留めむハ義

ホそむけば苦しさらぬふりホてやるハいとゞまへ

なくていのホともせむのさなくて心ひとつホ思ひ

こづらふとなり契冲云古今集陸奥歌ホあふくまホ

霧立渡明ぬとも君とバヤラド待バモベ

なし。下の句心にかえれどまご似あり

難波方ナニハガタシホヒ塩干之名凝ナゴリアクマデニ飽左右二。

人之見兒乎吾四乏毛。

難波方ナニハガタの難波潟なり。○塩干シホヒノナゴリ之名凝ハ契沖塩のひの
あふのこれるあまり水をあごりといふ第六ふなふ
はごの塩干のあごりまぐたしみむいへふるいも可
待とたむる也第七ふなごの海のあさけのあごりけ

ふもあもいそのりらごみごれてあらむ武烈紀ふ
天皇いまご太子なりし時よませ賜ふ御歌ふ志ほせ
のあをりをみればとあるもをとこと同韻の字あれ
ばなごりなるべし陳鴻が長恨歌傳ふ餘波をなごり
とよめり源氏物語あふ月さしいでし塩のあか
くみちきけるあともあらをみなごり猶よせのくる
波のあらきを柴の戸おしあけてなごめおたしまは
飽左右二人之見アクマデニヒトノミルとつゞけるハ第六ふ志ほひのなご
りまぐたし見むといへる心なり今も此あさりのを
とて女しやいとて三月三日住吉ふまりであてらひ

伊勢物語の浪ごるゆ、塗籠本ハ〇二字類聚抄ハ爾
 ハあごりの浪とあり、是より一〇二、字類聚抄ハ爾
 と作里〇吾四之毛ハ、四ハ、その一ト、たぢなるを、おもく
 いふ助辭、乏ハ少き意、毛ハ歎息辭なり、〇歌意ハ、あの
 愛しき女の宮づのへしてあれば、宮内小親く奉仕む
 人ハ朝夕あくまで小相見べのらむと、吾ハ別れ
 てより、見ることごとく少少之き事哉と云る、小や

安貴王謠一首并短歌

遠孀此間不在者玉梓之道乎

多遠見思空安莫國嘆虛不安
 物乎水空往雲爾毛欲成高飛
 鳥爾毛欲成明日去而於妹言
 問爲吾妹毛事無爲妹吾毛事
 無久今裳見如副而毛欲得

遠トホヅマ婦ハ、遠離ハス多ノキシニ里ニて居モる婦アガトホヅマなり。八三卷三七七夕ノ歌コトソカヨハ小ハ風カセクモ雲モ
 者ハ二ハ岸ノ爾ニ可カ欲ヨ倍ヘ杼モ母アガトホヅマ吾ノ遠トホヅマ婦ノ之コト事ソカヨハ曾ハ不ナ通ト九ニ卷十小ノ
 遠トホヅマ妻シ四ソ高コ爾ニ有アリ世セ婆バ不シ知ラ十ズ方ト手モ網タ乃ヅ乃ナ鴻ノ能ノ尋ノ來キ名ナ益マシ十シ
 卷ニ七七夕タ歌マ小ト遙トホヅマ嫫マ等タ手マ枕カ易カ寐シ夜ノ又ヨ八ハ丁ニ年シ有アリ而テ今イ
 香カ將マク卷ラム烏ス玉バ之ノ夜ヨ霧ギリ隱ガ遠トホヅマ妻ガ手テ乎ヲ乃ヲ道ミチ乎ヲ多タ遠トホ
 見ミハ、道ミチ之ノ遠トホきキゆユゑエ小コの意イなり。多タハハそソへ言コトなり。十七
 二十ニ丁シ小コ多タ麻マ保ホ己コ能ノ美ミ知チ乎ヲ多タ騰ト保ホ彌ミとホあア望シ〇思オモ空カラ嘆ナク
 三ニ丁シ虚ソラ中ナ山ヤマ嚴シ水ミヅ此コ空カラてテふフ言コトハ、今イマ世セ小コこコちチとトいイふフこと
 小コよヨくクあアさサれレり。九ニ卷シ一ニ丁シ小コ吾アガ念モフ情コ安ロ虚ヤ歎シ毛カとモ有モ。
 こコちチとト云イてテよヨくク聞キえエさサり。今イマ世セ小コ空カラ恐コソしシとトいイふフも。

こコちチあアそソろロしシとトいイふ意イなりと云イ里リ竹タケ採ツキ物語モノガタリ小コこ
 れレとト御ミ門カド御ミ覽ミどドてテいイのノ還マりリ賜タマえエむム空カラもモなナくクおオほ
 さサるとトあアるル空カラもモおオあアどド榮エ花ハ物語モノガタリ小コ大オホ藏ソウ卿キョウ正マサ光ミツ朝アサ臣シ
 おオひヒ奉ホウ里リてテかカへヘらラせセ給タマふフとトなナどドいイみミしシくク悲カしシかカへ
 らラせセ給タマふフ道ミチのノ空カラもモなナしシ云イ々々出デさせセ給タマ道ミチのノ空カラもモあアくク
 いイみミしシりリおオるルさサるルべベしシかカげゲるルふフのノ日ヒ記キ小コほホとトぎギ
 其ソノのノおオとトなナひヒ小コもモやヤまマきキ空カラなくクおオもモふフべベのノめメれレババ
 落オチ窪クマ物語モノガタリ小コをヲやヤりリ御ミてテりリづヅまマるルれレとトのノまマへヘババこ
 ちチてテあアりリくク空カラもモなナしシ源ゲン氏シ物語モノガタリ赤アカ石イシ小コ家カをヲなナれレさ
 のノひヒをヲさサりリてテ明アカくクれレやヤまマきキ空カラなくクおオげゲきキ給タマふフ小コか

毛事無久モコトナクの下シタ小コ一句五字のおちある小やと契沖ハ云れどおろつあな其ハ本ノまゝおてハ七言ノ三句重ル故ハあのおへるものまれど七言三句おて結今毛見如ハ本居氏云イマめさるハ長歌ハ甚多シト訓べ京小在一時見一如ク今もと云モシゴトタ副タ而テ毛欲得モガモハならびそひてもがなあ意なり○副タ而テ毛欲得モガモハならびそひてもがなあらまや一となり○歌意かくれさるところなり

反歌カヘシウタ

敷シキ細タヘ乃ノ手枕タマクラ不マカ纏ズ間アヒダ置オキ而テ年トシ曾ソ

經來不相念者ヘニケルアハナクモヘバ

歌意ハ妹イモの手枕纏タマクラびて間マカを置オキて逢見ぬこととおもひめぐらせバをや一年をそ經ヘ小けるさてく久キウくあをぬ事コト小て

あるよとなり

右安貴王娶ウメ因幡八上采女イナハチノカミノメノコ係念極甚愛情尤盛オホシ於時トキ勅斷不敬之罪退却ヒツク本郷ムコト焉ナ于是王意悼怛聊作此歌也コトニシテオホクニイマヒトシテオホクニイマヒトシテオホクニイマヒトシテ

八上、采女ハ、未詳なるべし。和名抄小。因幡國八上、美夜加郡古事記上卷小。八千矛神各有欲婚稻羽之八上比賣之心此八上郡の女なるべし。

門部王戀歌一首

飲字能海之。塩干乃酒之。片念

爾思哉將去。道之永手呼。

飲字能海ハ飲字類聚抄ハ三卷小。この同王歌小あり。
○塩干乃酒之ハ片念カダモヒを云むよめの序なり。○道之永手呼ハ呼字類聚抄ハハ道之長道ミチノナガチと云小同。既具云里○歌意ハ此カと妹ハ我事カを忘ぬらむを我ハさてもえあるまどけれバくれくと長き道ミチをかとおもひ小おもいつ、やゆらむとのこまへるなり。これハ往來を絶て後出雲の任より京小歸里上る時道小て娘子を更小思ひ出で堪カめてよみて贈里カまへるなるべし。

右門部王。任出雲守時。娶部
内娘子也。未有幾時。既絶往
來。累月之後。更起愛心。
仍作此歌。贈致娘子。
高田女王。贈今城王歌六首

高田女王ハハ。卷小も出て。高安王之女也。舊本小女字を脱せり。
と注せり。高安王の傳ハ。四上百廿六丁小出せり。此王ハ。天
平十一年小姓を賜りて。大原真人高安といひける人
のことなり。續紀小。神護元年正月己亥。無位高向女王。授從五位下。とあり。も一。向字ハ。田の誤小

て。高田女王ハ。ありざる。いと云説あり。神護ハ。天平
十四年ハ。大原真人高安の卒られてより。廿年あまり
經て後のこと。あれば。別人あるべし。
○今城王ハ。元曆本古寫本等注小。
今城王後賜大原真人氏也。とあれど。此王ハ。
集中小見えあるのみ。ふて。傳未詳あらじ。

事清甚毛莫言。一日太爾君伊
之哭者。痛寸取物。

事清ハ。事ハ。借リ。言ふて。然あらぬ體小言なげと。言清。い
ふとハ。云なるべし。往吉物語小。いゝある夜目小もこ
そハ。あるく侍なれ。御口きよさよ

とあるも、似たり。○君伊之哭者ハ、伊ハ、水關守伊の伊イふることなり。○君伊之哭者ハ、伊ハ、水關守伊の伊イふて、添ふる言シ之も、例のその一をぢをおもくいふ助辭ナク哭ハ、借ナク無ナクふて、君無者キミナクバといふことなるべし。○痛寸取物ハ、誤字あるべし。舊訓イタキハズソモふ、イタキハズソモ。今按、痛寸取ハ、憊不敢シヌなどありしを、誤寫せるあるべし。さらバ憊不敢物シヌヒアヘヌモノふて、シヌヒアヘヌモノと訓べし。物ハ、ものをといふ意なり。忍シヌひ堪タムむとあれども、得志のい堪ぬ物シヌヒタムをといふ意なるべし。○歌意ハ、然サあらぬ體シヌヒタムもてなして、甚言清くのごまふ事シヌヒタムあられる。一日たのりごふ。君シヌヒタムのおえしまさむてハ、志ぬいあへむとあれ

ども、一をぢふ深く思ふ情シヌヒタムふ、得堪られぬ物シヌヒタムをと云なるべし。次の吾背子ワガセコニ爾云々、現世コトヨニハ爾波云々などあるふよりて思ふふ、かく人言の繁シヌヒタムければ、遂シヌヒタムふ末とぐべし。もあらば、さらば互シヌヒタムふ。今朝を限シヌヒタムふおもひ止シヌヒタムべし。妹も再び吾を思ふ事シヌヒタムあられなど、清くのごまへるふより、志の言清く情なく詔シヌヒタムふなとよみ賜シヌヒタムふなるべし。

他ヒト辞ゴト乎ヲ繁シゲミ言コチ痛タミ不アハ相ザ有リ寸キ心ココロ在アル

如ゴト莫ナ思オモヒ吾ワガ背セ月ツキ

本二句ハ二卷小出て既く彼卷小云リ○心在如ハあ
る心のある如くといふなり古今集小こえ或往飛
鳥の川の不通ヨドメらバ心あるとや人のおもむとある
もおなド○莫思吾背ナオモヒワガセ背の下拾穂本小予ハ思ひ賜ふ
事おのれ吾夫子よといふ意なり○歌意ハ人言の繁
くこちとき故ふそれを憚りて相見おありきあこ
心のある如くお思ひ賜ふ

事おのれ吾夫子よとなり

吾背子師遂常云者人事者繁

有登毛出而相麻志呼

歌意ハ吾夫子の下をぢふ未遂むとつよくのこまを
ばよーや人言ハ繁くこちこくありともそれおもさ
えらぞして出て相見まゐらむべきを

となり上の歌をふみてよまれより

吾背子爾復者不相香常思墓

今朝別之爲便無有都流

復者不相香ハ。七言一句なり。常ハ第三句の頭ふつけ
て讀べ。○思墓墓。舊本基。小誤。元曆本古ハ。思へた小
やの意なり。○歌意か
くれとるところなり

現世爾波。人事繁來生爾毛將。

相吾背子。今不有十方。

現世爾波ハ。今の現在コノヨニハハといふなり。爾波ハ。他ニハ小む
のへていふ詞なり。○來生爾毛ハ。死ゆく未來ノチの世小

ぶふもといふ意なり。毛ハ。今俗小せめてといふると
の意なり。來生ハ。佛説の來世なり。○今の下古寫一本
小爾字あり。○歌意ハ。今現在小相見まハく思へど
も。人言志げきふよりて。あふことかなひのふより
今の世あらむとむ。せめて死ゆく未來ノチの世ふど
小も。相見むと思ふそ吾夫子カよといへるなを

常不止。通之君我使不來。今者
不相跡。絶多比奴良之。

今者不相跡ハ此までハあふべきのあふまじきものと
二方小おもひまどひ一の今ハ一方小あをどと決サダめ
ぬら一の意なり今者といふ詞皆同イマハジ。今者ハ俗小も
同ドウジもウハあふま今者許藝豆菜といふも此までハ
いとふ意なり。船出せらるべきのせらるまじきのと二方小おもひ
まどひ一の潮もよき不とふ叶ひぬれば今ハ一方小
船出せむと決サダめする意イマハふて同ドウジの絶多比タヒハ猶豫不
定をいふ言ふて既く具注キコト置此ハ常小止トモびつゞきて
通ひ來し使の絶間を置サダめるよくな
り○歌意かくれサダるところなく

16
125
96

